まなびあい企画　卒業生によるプレシンポジウム

コミ福における福祉教育を問う

【シンポジスト】　福田 祥之　（2015年コミュニティ政策学科卒業）
　　堤 彩　（2015年福祉学科卒業）
【コーディネーター】　大夛賀 政昭　（卒業生３期生）

１．企画の主旨

『まなびあい』は、卒業生と現役生と教員の３者の交流がその設立趣旨に書かれている。今年度の研究大会でも、まなびあい運営委員として、卒業生によるシンポジウムを企画することとなった。今年度のシンポジウムでは、『コミ福における福祉教育を問う』と題し、実習教育やインターンシップに着目し、卒業生がコミ福における学びを振り返り、当時の経験が今仕事を行う中でどのように影響するかをみなさんと考えることを目的とした。

２．シンポジストによるプレゼンテーション（現在の仕事紹介、当時の実習の学び、実習と今の仕事のつながり）

大夛賀　今日は、お２人のシンポジストをお呼びしております。2015年にコミュニティ政策学科を卒業された福田祥之さん、そして、同じく2015年福祉学科を卒業された堤彩さんです。お２人に、私が事前に３つほどのお話しいただくテーマをお伝えしております。その内容は、①現在の仕事紹介、②当時の実習の学び、③実習と今の仕事のつながり、となっております。この内容にそって、まずはお２人にお話をお伺いしようと思っております。本日は、どうぞよろしくお願いします。

[redacted]

福田　あらためまして、みなさん、こんにちは。コミュニティ政策学科、2015年卒業の福田祥之と申します。私はコミュニティ政策学科を卒業して、今、静岡で働いております。

＜仕事の内容について＞

[redacted]

現在は物流の会社に勤めております。物流というと、陸、海、空と、３つのセクションがありますが、私は現在、港の部門で働いております。今、船に毎日乗って、荷物の揚げ積みとかをやっております。

船といっても日本の内航船と、海外からやって来る外航船の大きく２つがあります。さらにその種類は、コンテナ船と在来船の２つがあります。このうち、コンテナを積んでいるのがコンテナ船です。このコンテナの規格は、世界共通で、どこの船でも、どこの港でも、同じものを扱うような形になっています。一方、在来船は、船全体が箱のようになっています。箱の形もばらばらなので、中に積む荷物も本当に大小さまざまです。

船の中に積まれているものは、紙の原料であるパルプ、穀物、あとは炭などの燃料といったものです。１トン、２トンといった単位で、南米や北米をはじめとする世界中から荷物を持ってきて日本に運んでいる。逆に、日本から木とか間伐材とかを積んで全世界に輸出しているということを仕事として行っています。

＜当時の実習の学び＞

当時は、コミュニティ政策学科の３年生のときに、インターンシップの授業で、NGO JENというところにインターンさせてもらいました。この時は、そのNGOが毎年行っているグローバルフェスタというイベントにかかわる広報の仕事（メールやSNSを通じた広報）を担当させてもらいました。

４年生のときにもう一回インターンやらせてもらいました。これは、コミュニティ政策学科のプログラムではなくて、立教大学全学で募集している国連UNVボランティアに応募し、このボランティアを行う機会を得ました。このボランティアの特徴は、有償のボランティアということで、半年間海外でお金をもらいながら働くことができます。

私は、フィリピンの国連オフィスで働かせていただきましたが、ここでも主に広報業務を担当していました。ボランティアに関するイベントをやったり、現地の大学生に国連の活動を紹介する講座を開いたりするといったことを行っていました。オフィスには、広報担当がいなかったこともあり、裁量広く仕事をやらせてもらうことができ、大変勉強になりました。

＜実習と今の仕事のつながり＞

私のインターンは、国際協力に係るものだったので、学部３年生のときのインターンも、フィリピンの国連オフィスでのインターンも、英語力が求められてい

ました。まず、そこが現在の仕事にも生きていると思います。

今の仕事でも英語を使って、毎日コミュニケーションをとっています。必死に英語を勉強していて良かったと思います。特に、フィリピンの国連オフィスのインターンに応募するための面接対策の時には、大学の先生に大変お世話になって英語の面接の練習をたくさんさせてもらいました。

あと、もうひとつは、インターンを通して、さまざまなロールモデルを発見できたことです。具体的には、働いている人はバックグラウンド・経歴がさまざまでした。

そういった人たちと触れ合う中で、自分がどういう姿を目指せばいいのかを考える契機になり、仕事を通してさまざまなことを教えてもらったことが、今の一番の財産になっていると思います。この２つのインターンでは、専門性が求められました。何もできませんと言う人には仕事は与えられません。そこで、何ができるかを必死に探すことになります。そのような意識をもって仕事をすることで初めて人は成長するのだと思います。

最後に、責任感ということも指摘したいです。自分がやった仕事に対して責任を持つということは、学生の間には想像しづらいかもしれないのですけど、非常に大事だと思っています。特に今の職場では、ちょっとしたミスが原因で人がなくなってしまうことが起こりうるのです。そのような環境下におりますので、自分の仕事に責任感を持たざるを得ない環境に今あります。

インターンの時にも、自分の仕事の成果については、名前が出ていました。そのことが責任感を意識するきっかけになったかもしれません。以上です。ありがとうございました。

大夛賀　福田さんありがとうございました。それでは、堤さん、よろしくお願いいたします。

堤　堤彩です。よろしくお願いいたします。本日の企画の主旨は、実習がどのように仕事につながっているかということでしたので、私が福祉の仕事を目指すまでの経緯を中心にみなさまにお話しできたらと思います。

[redacted]

＜仕事の内容について＞

私は、福田くんと同じ2015年３月に福祉学科を卒業いたしました。

同年４月に、社会福祉協議会に就職し、今最初にボランティア係に配属され、２年と７カ月目が立ったところです。汗水垂らしながら、涙も流しながら頑張っているところです。

私の職場、ボランティア・センターは、築50年以上の古びた建物内にあります。ここで相談員として、ボランティア・コーディネートとボランティアに関する広報誌の発行と、福祉関係の講座、イベント、シンポジウムの企画、ポータルサイトの管理運営といったことをおこなっております。

ボランティア・コーディネートを簡単に説明いたしますと、ボランティアをしたいという趣味の方がいらっしゃいます。ボランティアに来てほしいなっていう市民の方、あるいは福祉施設、団体がございますので、その仲介役でコーディネートをおこなうのがボランティア・コーディネートです。このボランティア・コーディネートは、ボランティア・センターの主な役割の一つとなっています。

＜当時の実習の学び＞

私は、福祉学科に所属していたことから社会福祉士をとるための実習に行ってきました。まず、市役所で実習をおこないまして、生活保護に係る相談から家庭訪問、就労支援の現場に訪問したり、困難事例の検討をする会議なども同席させていただきました。

もう１カ所は、社会福祉協議会に実習に行きました。ここでも高齢者の支援をしている地域包括支援センターとか、権利擁護センター、デイサービスとか福祉作業所での支援に関わらせていただきました。

そこでの学びと気付きですが、いろんな困難に直面している方に出会い、実際の暮らしの現場をみることができました。

その困難とは、貧困、孤立、虐待、疾病、あと、精神疾患ですね、うつ病とか統合失調症とか様々なことがあることを実感しました。

実習の機会がないとなかなか出会えない方たちだったかなと思います。

そういった方々の支援に係る中で、悲しい気持ちだったり、寂しい気持ち、苦しさ、むなしさ、怒りだったり、焦りだったり、いろんな気持ちに触れることができました。

一方で、そういった方々は一人一人、皆さん、本当は生きる力を持っていらっしゃることもわかりました。

こうした経験から、支援者は、黒子となってその人の人生を応援するということがもとめられているということを学ぶことができたと今振り返ると感じます。今でもその思いを大事にしながら、福祉の現場で働いています。

＜実習と今の仕事のつながり＞

私は、実習の経験を通して、今の仕事を決めました。具体的には、２つ目の実習先で会った社会福祉協議会で働き、地域全体の福祉力を高める活動を行ってお

ります。
　具体的には、ボランティア・コーディネートを通して、住民の方一人一人の力を信じて一緒に解決策を考えていくということを行っております。
　ボランティア・コーディネートでは、こちらから何か提案するのではなくて、その人と一緒に寄り添いながら考えていきます。住民の方が、この街に住んで良かったなとか、みんなが支えてくれているなとか、毎日が充実しているな、と思っていただけるような事業を企画しております。
　実習の時に経験したように、最初は、怒りや悲しみ、苦しみを直にぶつけられるわけですけれども、それと向き合いながら、一つ一つ解きほぐすことで、生活に満足感を感じてもらえるような働きかけを行っています。
　私は今仕事を通して、地域住民の方のいい笑顔に出会うこともできています。それが私の仕事のやりがいにつながっています。そのような支援に関わる人の反応があると、普段の忙しさを忘れ、この仕事について良かったなと思うのです。この思いは、実習の時から変わっておらず、つながっていることかと思います。今後もこの思いを大事にしていきたいと思っています。私の話は以上です。ありがとうございました。

３．質疑応答

大夛賀　駆け足ですが、お２人の方に10分ずつ発表いただきました。お２人の発表から、それぞれの学科らしい学びをされていたと感じました。ここから、いくつか質問していきたいと思います。まず、もし実習やインターンがなければ、自分はどんな進路をとっていたかということです。

＜もし実習の学びがなかったらどんな進路をとっていたか＞

福田　もし、インターンがなかったら、こんなに英語もしゃべれることもなかったし、NGOとか国連といった国際協力の仕事についても詳しく知ることもなかったと思います。
　でも、実際の仕事の内容を知れたことが本当に一番財産になっています。ゆくゆくは、国際協力の仕事もやってみたいなと思っています。もし、インターンがなかったら、まったく異なる進路、例えば、普通の一般企業に入って仕事していたかもしれません。

大夛賀　ありがとうございます。では、同じように堤さん、お願いします。

堤　３年生のときに皆さん通常、社会福祉士の実習行くのですけれども、私は行きませんでした。福祉の仕事って自分に向いてないなと思ったからです。

　私、福祉の仕事ができるほど優しくないし、支援が必要なひとに寄り添えないよと思って行きませんでした。でも、せっかくだから、４年生でも、普通の学生と比べたら遅いかもしれないけれど行ってみようかなと思って実習に行ってみました。
　そしたら、実習を通して、いろんな方と出会うことができました。そういった人の隣にいられたらいいなと素直に思うことができました。一般企業の合同企業面接会などにも行きましたが、なんか違うなと思ってしまいました。やはり、実習を通して感じた仕事の方が、私のやりたいことなんだと実感して、この道を選びました。

大夛賀　ありがとうございます。やはり、インターンシップや実習での学びが、２人の進路に大きく影響しているということですね。ありがとうございました。

＜フィールドを通して学ぶことの意味＞

大夛賀　もう１つ、お話を聞いていきたいと思います。本日は、実習・インターンを取り上げていますが、これが他の教科目とどのように違ったかを教えていただけないでしょうか。

堤　そうですね。実習は、これまでにもお話ししましたが、本当に困難を抱える方のリアリティの生活に出会うことができるということでしょうか。
　例えば、社会福祉協議会の実習で、認知症をお持ちでお家が片付けられなくなってしまった方のお宅を訪問したということがありました。
　玄関開けたら物がワーッと積み重なっていました。それをかき分けながらお家の中に入って、台所のぞいたら、生ゴミとか洗ってないお皿が山積みになっていました。リビングに入ったら、チラシとか家具とか小銭とか、全部バーッと散らかっているのです。
　２階に登ったら、ベッドの上にその人のお洋服が山積みになっていて、足の踏み場もないような状態でした。
　でも、後にその人の過去を伺ってみると、昔は高級デパートの売り場の店員をされていて、すごく裕福な暮らしをしていた方だったということでした。
　認知症という疾患が原因で、お一人暮らしで片付けられなくなってそのような状況に陥ってしまったということです。
　その方の、すごく鮮やかな、きれいな着物を着た、凛とした、30代・40代ぐらいの頃のお写真が出てきてみせてもらうことができました。
　私がその時みたその人とは全然違うのですけれど、そういう時代もあったのだな、人の人生っていろいろあるのだと強く思ったことを覚えています。

そういう人生に、いろんな人生に出会うっていうのもなかなかない経験だな、と思います。そのような経験を得ることができるのが実習だと思います。

大夛賀　ありがとうございました。では、福田さんお願いします。

福田　堤さんと答えは似ていると思いますが、インターンが他の教科目と何が一番違うのかというと、やはり現場が見えるっていうところだと思います。他の教科目は座学が中心で、制度とかの知識が得られるのですが、現場で働いている人の声、当事者の声は、現場に行かなければ分からないことが多いし、そういうのが見えるのがインターンや実習のいいところだと思います。

私は、政策学科なので、政策学科の話になってしまいますが、インターンは通常１週間といった期間が多く簡単に受けることができるのが大きいと思います。しかも政策学科の公式のプログラムなので、自分で正規な手続きとるよりも簡単に入れることがメリットと思います。学生の皆さんも機会があったらぜひインターンをやっていただけたらと思います。

大夛賀　ありがとうございます。そろそろお時間になってきたので、次の先生方のセッションにつなげていきたいなと思います。このコミ福での学びを振り返ってみてその特徴などについて意見を頂きたいと思います。

福田　政策学科だけじゃなくて、スポーツウエルネス学科や福祉学科があったおかげで、他の学科の教科目をたくさん取ることができました。堤さんは、福祉系のお仕事をされていますが、私が関心をもった国際協力の現場でも、生きる力を支える福祉関係のことがやはり重要になってきています。当時から福祉に関連する学科がすぐ横にあって、勉強できたことは大変プラスになったと思います。

大夛賀　ありがとうございます。では堤さんお願いします。

堤　私は、福祉学科と政策学科の科目、半分ずつぐらい取っていました。藤井先生のゼミにもお邪魔しましてNPO論とかボランティア論とか行政学を学びました。私は今、ボランティア・センターで働いているのでそのような学びを得ることができたのが大きかったと思います。いくつかの学科があることで幅広く学べた、視野を広げられたと思っております。

＜現役生へのメッセージ＞

大夛賀　ありがとうございます。最後に、卒業生として一言、現役生にメッセージがありましたら、お２人からいただきたいと思います。

福田　さきほど、学生の分科会での発表のほうを見させてもらって、楽しそうなことやっているなぁと感じ、自分も学生時代に戻りたいと思って、とてもわくわくしてしまいました。やはり学部の４年間あっという間に終わってしまうので、やりたいことを今のうちにやってほしいと思います。いろんなところに簡単に行けるのって学生の特権だと思います。もし、興味があるものを見つけたら、企業でも、どんどん自分からアポイント取って、行ってみるといいと思います。社会人になったら、そういうことをするのは難しいです。

だから、やりたいことは、今のうちに全部やるというような気持ちで、残りの学生生活を過ごしてもらいたいと思います。本日は、ありがとうございました。

大夛賀　ありがとうございます。堤さん、お願いします。

堤　福田くんと同じようなコメントになってしまいますが、いろんな現場に行ってほしいなと思います。それは実習でもインターンでもいいし、ボランティアでもいいし、バイトでもいいと思います。いろんな人と出会って、いろんな人生、いろんな価値観と出会ってほしいと思います。その中で自分の価値観や生き方を探していってもらうといいのかなと思います。

もちろん、学生時代で、すべて答えが出るわけではないと思うんですけれども、こういった経験を経ることで、自分の方向性が見つけられるのかなと思いますので、いろんな所に足を運んでもらえればと思います。本日はありがとうございました。

大夛賀　お時間が来てしまいました。お２人の方にもう一度拍手をお願いします。

本日は、どうもありがとうございました。

５．コーディネータとして

このシンポジウムを企画したのは、『生のリアリティと福祉教育』という書籍がコミュニティ福祉学部の先生方の執筆で出版されたことからもわかるように、コミュニティ福祉学部では現場実習の教育を大事にされているのではないかと思っていたからであった。今回、卒業生が実習をどのように思っているのかをもう一度聞いてみたことで、その現場実習を重視した教育の特徴やその意義を改めて振り返ることができたのではないかと考える。今後も、コミュニティ福祉学部

の一卒業生として、そして、まなびあい運営委員として、研究大会のみならず卒業生による企画を考え、実施していくことで、卒業生と現役生、そして大学の教員の３者の「まなびあい」を推進していきたいと考えている。